

友よ 第一回

赤神 諒



序 戸次川の落日

——天正十四年（一五八六年）十二月、

豊後国・鶴賀城

眼下を往く異郷の川は、冬の穂やかな夕照せきしやうを浴びて最後の輝きを放っていても、罪深き人の業を未だ洗い尽くせぬままだった。川の両辺に無惨に転がる数千の遺骸を村人たちが茶毘だびに付してゆく姿は、いつ果てるとも知れぬ地獄の責め苦のようにも見える。

島津軍の宿将、新納武蔵守忠元にいろうむさしのかみただもとは近習に呼ばれ、川に面する曲輪くるわを後にした。

友よ 第1回

征して間もない城の主廓へ戻る。

交戦中の敵軍から、意外な訪問客があった。主家の御曹司の遺骸を引き取りたいという。

「谷忠兵衛と申します。戦の最中お目通りいただき、感謝に堪えませぬ」

新納が控えの間に入ると、端座していた五十がらみの将は、穏やかな物腰で頭を下げてきた。四国土佐の雄、長宗我部元親の懐刀として、忠兵衛の名は聞いている。

かねて島津と誼みを通じてきた長宗我部は、昨夏のへ四国の役で羽柴秀吉に敗れて降り、今秋へ九州の役の先鋒を務める四国勢の一の手として上陸してきた。今は、島津の敵である。

「貴殿こそ、ようこの城までお出でなすったものよ」

ここ鶴賀城では、大友家のキリシタンたちが頑強な抵抗を続けてきたが、戸次川で島津が大勝すると、ついに諦めて開城し、新納がこの日制圧した。一方、島津の本軍は昨日、豊後の国都府内へ侵攻し、町を焼き払っていた。いつ誰に襲われても不思議でない道中であつたはずだ。

「こたびの戦では、死者の数が夥しく、われらも持て余してござつたが、願行寺の梅巖和尚なる奇特な高僧が、敵味方の別なく引導を渡してくれておる」

「それは、何ともありがたきこと」

友よ 第1回

あれだけの土佐将兵が死んだのだ。この男も親しき身内や家臣を幾人も失ったに違いない。

新納も還曆を過ぎ、人を見る目くらい養ってある。酸いも甘いも噛み分ける知将の凄みを忠兵衛に感じはしたものの、男の疲れ果てた顔と柔らかな仕草に、駆け引きの臭いは嗅ぎ取れなかった。

「こたびは、貴家と当家の奇しき縁にすぎり、ご無理をお願い申し上げた次第にござる」

改めて頭を下げる忠兵衛に向かい、新納は頷き返した。

「お話を承り、急ぎ支度をさせ申した」

新納が呼ぶと、家人が一本の太刀を持って現れた。諸手で受け取り、忠兵衛の前に置く。

「長船の名刀、三尺五寸の兼光。御曹司のご遺品でござるな」

「朱塗りの拵えに、猿猴（河童）の目抜きは、確かに。……これを形見に、と？」

忠兵衛が訝しげな顔で新納を見ている。

「そっと、抜いてみなされ」

新納が促すと、忠兵衛はあちこちに深淺の傷が付いた鞘を両の手に取った。

刀身を抜き放ちながら、忠兵衛の表情が驚愕へと変わってゆく。

太刀は鉏元から切っ先まで、ほとんど寸分の隙なく切れ込みができ、もはや原形をとどめていなかった。愛用らしい赤柄の大雑刀が刃

友よ 第1回

毀^{こぼ}れで役に立たなくなると、薩摩兵から槍を奪い取ったが、最後にはこの太刀で戦っていた。

「貴家の御曹司は、一刻余りもの間、四方を囲む方の敵を相手に、寡兵で戦い続けられた。わが島津は九州一の勇猛で鳴るが、あの戦いぶりには皆、ただ感嘆するばかりであった。生前を知らぬわしでも、涙を禁じえぬのじゃ。対面は、和尚が茶毘に付してからになさってはいかがか」

忠兵衛はハッと気付いた様子を見せたが、やがて小さくかぶりを振った。

「お心遣い痛み入ります。されどわが主からは、御曹司を必ずそのまま連れ帰るよう、命ぜられておりますゆえ」

「さようか。本来なら当方よりご遺骸をお送り参らすべきところ、ご容赦ください。あれほどの勇将ゆえ、懇^{ねんご}ろにお弔^{とむ}いせんと、麓の寺に安置させてござる。わしのご案内致そう」

新納が先に立ち、狼煙^{のろしだい}台の下から戸次川の辺^{ほとり}へ降りてゆく。

寒気ゆえに夏ほど強烈ではないが、いつまでたっても死臭には慣れぬものだ。

村人たちが戸板に乗せて遺骸を寺へ運んでゆく姿が見えた。島津にとって豊後は敵地だ。頼んだわけでもないが、新納はありがたく任せている。昨日も真っ暗になるまで精を出していた。

友よ 第1回

平地に出ると、挽歌を奏でるように、静かな川のさざめきが聞こえてきた。

両軍は一昨日、戸次川の河畔で激突した。

「あれは、まことに面妖な戦でござった。戦場へ出て四十年、あのような戦をしたのは、わしも初めてじゃ」

島津の誇る名将、島津家久は見事な策略を用いて、羽柴軍の総大将仙石秀久を瞬く間に撃破し、敗走させた。一万八千余の島津軍に対し、戦場に残った四国勢はわずか四千余。家久以下、島津方の誰もが、完勝を確信した。古参の宿将、新納忠元もその一人だった。

「じゃが、戦はまだ、終わってなどおらんのだ。いや、敵の総大将が逃げ出しおってからが、まさしく本物の戦であった……」

島津軍が大挙押し寄せて戸次川の両辺を埋め尽くし、友軍の将を討たれても、父元親の本軍と分断されても、味方の軍勢が大軍に押し流されて撤退しても、その若き将は、約七百人の土佐将兵と共に、最後まで絶望の戦場に踏みとどまった。ついには四方を敵に囲まれながら、最後の一兵になるまで死闘を続けた。島津の将兵は畏怖と讃嘆をもって、若者の清冽なる死にざまを、見届けた。

新納は山麓に建つ古びた法堂の中へ忠兵衛を招じ入れた。

中には、長身の遺骸が横たわっている。

「この、お姿は……」

忠兵衛は声を失い、骸の傍らにへたりこんだ。

友よ 第1回

最初は肩を震わせていたが、やがて男泣きに泣き始めた。

若者の具足は矢弾、太刀、槍の痕は数えきれず、袖も草摺くさずりも、随所が切れ、裂けていた。

「わしも鬼武蔵の異名をとる男よ。この世に怖いものなんぞ、なかった。戦場を楽しんでさえおったわ。じゃが、わしは初めて、敵を怖いと思った。土佐の将兵たちはあの時、荒れ狂う一頭の巨龍のように見えた……」

実際、新納は三倍の将兵で突撃しながら、逆に押し戻され、一時は敵の鋭鋒を避けるために、兵を引かざるを得なかった。新納自慢の勇猛な薩摩の精銳が、あの若者たちの前では、怯えた。こんな経験は初めてだった。

「本当にわれらが勝ったのか、今でも、妙な気持ちでござる」

島津方の戦死者は千人を超えていた。だがそのほとんどは、長宗我部信親によって統率された青龍のごとき一隊との最後の戦いで、命を落とした。

「この若人は、いかなる御仁であられたのか」

忠兵衛は涙を拭いながら、途切れとぎれに答えた。

「性柔和にして、決して人を貶けなさず、礼儀正しく、戯ざれ話も野卑でなく、諸士を愛し、民を慈しみ、皆から慕われる、稀有けうの御曹司でござった……」

さもあらん。だが新納には、どうしても腑に落ちぬことがあった。

友よ 第1回

寡兵とはいえ、あれほどの采配をする戦上手が配下の精鋭と共にあったのなら、死の待つ戸次川の戦場から離脱できたのではないか。

——わからぬ。

なぜ、あの若者は、必敗必死の戦場にとどまったのだ？

なぜ、あの七百もの土佐将兵たちは最後の一兵まで、若者と運命を共にしたのだ？

新納は落日を感じて、法堂から外を見やった。

戸次川はちょうど、あの死闘がついに終わった時と同じように、薄暮の空を映し出していた……。

友よ 第1回

主な登場人物 ● 第一部

長宗我部信親 <small>ちやうそかのぶちか</small>	長宗我部家の御曹司。通称、弥三郎。
谷彦十郎 <small>たにひこじゆうろう</small>	谷忠兵衛の嫡男。土佐神社の神官。
るい	信親の母・滝に仕える侍女。
波川弥次郎 <small>はかわやじろう</small>	信親の従弟。波川清宗の長子。
お福	弥次郎の姉。信親の従姉。
羽床資吉 <small>はゆかすけよし</small>	讃岐の土豪・羽床氏の嫡男。
福留隼人 <small>ふくどめはやと</small>	土佐随一の猛将。信親の武芸の師。
長宗我部元親	信親の父。土佐国主。
谷忠兵衛 <small>ちゆうべえ</small>	元親の懐刀。元神官。信親の学問の師。
桑名太郎左衛門	長宗我部家臣。信親の弓と礼の師。
波川清宗	元親の義弟。
滝（石谷ノ方） <small>たき</small>	元親の妻。信親の母。
三蔵 <small>さんぞう</small>	信親に仕える三人の近習たちの総称。
入江左門 <small>いりえさもん</small>	元親に仕える謎の忍び。
渡 <small>わたる</small>	岡豊に住まう一領具足。
新目弾正 <small>にいめだんじやう</small>	讃岐藤目城の守将。

友よ 第1回

第一部
石清川

第一章 土佐の御曹司

——天正六年（一五七八年）八月、

土佐国・岡豊



終わりにかけた夏の夕べ、最後の方で歌い続けていた蝉たちが、にわかには鳴くのを止めた。ギギッと何かに驚いた様子で、慌ただしく鎮守の森を飛び去ってゆく。

谷彦十郎たにひこじゆうろうは神事の邪魔をされるのが、何よりも嫌いだっただ。

〜 速川の瀬に坐す 瀬織津比売せおりつひめと云ふ神 大海原おほうみに持ち出でな

む——

かまわず誦するが、しばしの静けさを取り戻した土佐神社の境内は、たちまち明るい人声で賑やかになった。

長宗我部の御曹司がまた、来たらしい。

——これで、かれこれ七度目、か……。

半月ほど前に今冬の初陣が決まってから、足繁く訪れてくるようになった。

友よ 第1回

彦十郎は幣殿へいでんにあつて、低く歌うように朗々と祝詞を吟じ、夕拝の神事を続ける。

乱世にありながら、土佐国が今日もいたって平穏なのは、神官たちの祈りが聞き届けられたゆえか、それとも長宗我部元親もとちちかという一代の英傑が世に出たおかげか。

〜 四国の卜部等 大川道に持退まかりいで出て被却はらえやれと宣る

彦十郎が被い串を白木の十字台に戻すのを見計らったのだろう、背後の拝殿から衣擦れの音が近付いてきた。巫女のお橋きょうが遠慮がちな声で訊ねてくる。

「宮司さま。御曹司がまた、お見えになりました」

おもむろに振り返ると、笑顔の少女がいた。十三歳だが気配りもあり、何かと役に立つ。つきたての餅のように白い頬が、彦十郎の妻であつたお橋の姉を思わせる。

「懲りぬお人だ。さりとて、追い返すわけにもいくまいな」

「当たり前です」

わざわざ町の外れまで足を運んできた相手は、仮にも国主の後嗣である。用向きはむろん承知していた。だが一昨日も、はつきりと断つたはずだ。

「世は思うに任せぬことばかりだ。私は忙しい。早めに引き取っていただく。茶など出さずともよいぞ、お橋。その笑顔も引っ込めよ」

友よ 第1回

彦十郎は低音で吐き捨てながら、被い串の紙垂しでのほつれをほぐした。罪深き乱世ゆえに、穢けがれが溜たままっていよう、そろそろ川へ流す頃合いか。

「今日もすげなくお断りになるのですか？ わたしは、あのお方がお気の毒に思えてきました」

お橋がこぼすのも、無理はない。

土佐神社は長宗我部家の居城、岡豊城おこうから西に一里の山麓にある。あの若者も暇ではなからうに、何度邪険に扱っても、長い参道を下馬して歩き、めげずに笑顔でやってくる。

「私には、私の決めた生き方がある。父上とは違うのだ」

父の谷忠兵衛ちゆうべえは途中で神に仕えるのをやめ、俗世に戻った。今では長宗我部家臣団に加わり、元親最側近の一人となって活躍している。

「出過ぎたことを申しました。お迎えして参ります」

慌あわててお橋がぺこりと頭を下げ、足早に去った。別に怒ってなどいないが、誰に対しても無愛想な彦十郎の物言いは、しばしば誤解される。本来は出迎えるべきだが、愛想を尽かさせるには、無礼も必要だろう。

拝殿へ下がって座り直そうと、彦十郎が神前から立ち上がったとき、早くも元気な足音が聞こえてきた。廊下を賑やかに渡ってくる清涼な水色の小袖が見えた。

友よ 第1回

「すまん、昨日は色々な連中に会っておって、来られなんだ。息災にしておったか、彦十郎？」

来るよう頼んだ覚えは金輪際ないのだが、と心中で返しながら、彦十郎は拝殿から向かって左に坐して平伏した。

信親とは、神前で向かい合う形である。

「一神官ごときのため、たびたび無駄足をお運びくださり、恐悦至極に存じまする」

「おう、お主が俺に仕えてくれるまでは、通い続けるつもりだ」

これまで、嫌味や皮肉の棘を言葉に精一杯込めてきたが、もしやこの若者には通じていないのか。

促されて顔を上げると、信親が並びのよい真っ白な歯を見せて笑っている。

押しも押されもせぬ長宗我部家の御曹司、弥三郎は三年前、畿内で覇を唱える織田信長から一字を賜って「信親」と名乗り、早めの元服を済ませていた。

「この神社の風が清々しいのは、東西の小川に挟まれているおかげだな」

まだわずかにあどけなさを残す細面は、美女と名高い母の石谷ノ方の容貌をよく引き継いで、稀に見る美男子だった。弱冠十四歳だが、日々の鍛錬で鍛え上げてきた堂々たる体軀は、すでに六尺近い。元親が付ける師たちから多くを学んで知勇兼備、まさしく土佐の次

友よ 第1回

代を担う英傑なりと、家中の期待を一身に集めている。爽やかで朗らかな性格は、人嫌いで有名な彦十郎さえ、かすかに好意を覚えるほどだった。

「して、彦十郎。折り入っての俺の頼み、考えておいてくれたか」
心苦しいが御意には添いかねると、一昨日も返答したばかりだが、信親は帰りがけに「考えておいてくれ」と改めて頼んだから、その答えを聞きに来たと言うのだらう。

まるで初めて返答を聞くような顔つきで、信親がまっすぐに彦十郎を見ている。邪気のない瞳は、底まではっきりと見える川の流水のように澄んでいた。

「こたび俺は、一手を預かって初陣に臨む。お主には是非とも、俺の軍師になって欲しいのだ」

長宗我部による本格的な讃岐侵攻戦がこの冬、始まる。
視線を床に落としながら、彦十郎は両手を突き直した。

「その儀は何卒ご容赦を。思うところあって、武士をやめたばかりの身にございますれば」

この春、神官となった彦十郎は、黒の立烏帽子たちえぼしに真っ白な浄衣しか着ない。今もそうだ。

「なぜお主は武士をやめたのだ？」

彦十郎は父に従い、何度か戦に出た。ある戦から凱旋がいせんしたとき、戦の間に、娶あとったばかりの新妻が病で急死していた。偶然に過ぎまいが、

友よ 第1回

息を引き取ったのは、命乞いする敵を容赦せず鉄砲で撃ち殺した日だった。以来、猪でも狩るように人を殺している自分が嫌で堪らなくなった。

「愚父は血迷うて武士になりましたが、谷家は代々、この社の神官でござる。親の過ちを正すは、子の役目と心得ており申す」

土佐国総鎮守一宮の土佐神社は「南海総鎮守」とされ、創祀以来、約千年の歴史を持つ大社だ。六百年ほど昔に神階を「正一位」とされたが、打ち続く戦乱のなかで社殿は荒廃し、ついには焼かれた。神職であった谷家の当主忠兵衛は、勃興してきた元親に接近し、神社再興を懇請した。忠兵衛の人物を見抜いた元親は「本殿、幣殿、拝殿の再建」を条件に、仕官をするよう求めた。悩んだ末これに応じた忠兵衛は主家によく尽くし、元親も七年前、約束通り入蜻蛉式の立派な社殿を再建した。

「のう、彦十郎。祈りで、人を救えると思うか？」

皮肉や非難は込められていない。純朴な問いかけだった。

「さように願ひ、日々この拝殿で、祭祀を執り行っておりまする」

正直に言えば、彦十郎はさして神の力を信じていなかった。もしも神が人間の祈りを聞き届けてくれるなら、現世の地獄はとっくに終わっているはずだ。「谷家の者が宮司として神事を継承すべし」との言い草は、世を捨てる方便にすぎない。独り彦十郎は、神事にかこつ

友よ 第1回

けて乱世に背を向け、古今東西の書物を読み耽り、神仙の境地に遊んでいるだけだった。

「多大なる働きに比して、谷家は所領が少ない。禄が足りぬなら、俺が父上に話をつける。四国統一戦で、長宗我部がお主ほどの才を使えぬとは、もったいない話ではないか」

身を乗り出してくる信親から、若い熱気が暑苦しいほど伝わってきた。

彦十郎はさりげなく立烏帽子を整え、白い浄衣の袖を直しながら、そっと身を引く。

「お主は決して俺に追従をせぬ。そこも気に入った」

元親は、信親を文武両道の後継者として育てるべく、その道の師を各地から岡豊城に呼んだ。家臣の子弟も学びを許されたが、何事も一を聞けば十を知る彦十郎には、退屈でならなかった。武芸は鉄砲を学んだが、腕前もやがて師の沖長門おきななかとを凌いだ。師から学ぶ事はないと結論するや早々に身を引いて、書物を読み、自ら考えるようになった。人と交わるのは煩わしいだけだ。ゆえに書物を通じ、時代と国を越えて賢人たちから学んできた。

他方、信親には、立身出世を願う家臣団の子弟が群がった。行事の際などは少しでも出世の糸口にしようと、将来の主君に挨拶するための馬鹿々々しい行列ができるが、彦十郎は孤高を守った。追従を一切せぬから、信親とはろくに口も利いたことがなかった。

友よ 第1回

「私ごとき神官が、お役に立つとは到底思えませぬ」

「あの親信ちかのぶが言うておる。己が身に万一の事あらば、谷父子を長宗我部の知恵袋にせよ、とな」

宿将久武親信ひさたけは元親の軍師として、土佐統一を成し遂げた家中随一の謀将であった。彦十郎の軍学の師でもあり、家臣団で唯ひとり、彦十郎が真に認める将だ。家臣団は老いも若きも競って親信に追従するが、その人物眼は確かで、自分が高く買う者しか元親に推挙しなかった。

「谷忠兵衛が献ずる策の大半は、実は息子から出ているとの噂も聞いた」

あながち嘘でもない。忠兵衛の献策の少なくとも半分は、彦十郎が出所だった。

「俺の師たちも、次代の家臣団筆頭はお主だと口を揃えている」

彦十郎は両手を突くと、丁重に黒烏帽子の頭を下げた。

「私は神に仕えると誓った身。俗世に戻ることはかないませぬ」

信親は天を仰いでカラカラ笑い出した。

「神様とお主を取り合うわけか。容易な戦いではあるまいが、俺は諦めぬぞ」

「恐れながら、何度お越しになろうと、私のお答えは変わりませぬ」

彦十郎は素っ気なく冷たい声を発した。が、この若者の熱気に、はたして通用したかどうか。

友よ 第1回

「おお、そうじゃ。お主は阿波の大歩危、小歩危を見たか？ 家中でも大評判ゆえ、俺も見物に行ったのだ」

長宗我部領の新名所について、信親は身振り手振りを交えつつ熱弁をふるった。

一昨年、長宗我部はへ四国のへそと言われる阿波国西端の拠点へ白地城を制し、吉野川沿いに奇岩と断崖絶壁の連なる名勝地を手に入れた。忠兵衛が白地城の城代とされ、彦十郎も父に従って出陣した際に見たが、神の優れた造形物を目の当たりにしながら、「戦」という罪深き愚行に明け暮れねばならぬ人生に、いっそう嫌気が差したものだ。……だが、何の関係があるのだ？

「川は、気の遠くなるほどの歳月をかけて巨岩を削り、ついにあの見事な峡谷を作り上げた」

信親の川好きは有名で、猿猴がいると信じて探しているらしい。我田引水でおやみに川の話を引き合いに出す癖があるとも聞く。ただ水が集まって流れるだけの川を、何ゆえそれほどにありがたがるのか彦十郎には皆目わからぬが、時を掛ければ、彦十郎の気も変わるとも言いたげだった。

「若殿、ひとつお尋ねを」

「おう、何でも答えるぞ。俺は嘘を吐かぬし、吐けぬ。隠し立てもせぬ男だ」

友よ 第1回

信親は誇るように胸を張った。おめでたい御曹司だ。人間は、他人にも自分にも嘘を吐かねば、生きてはいけぬ。その悲しき性をまだ知らぬとは。

「若殿から御館様（元親）にお話あって、愚父に命じられれば、私とて出仕を断るのが、いささか難しゅうなり申す。何ゆえ、さようになさらぬ？」

信親は怪訝そうな顔で、彦十郎を見返した。

「至誠天に通ず、よ。俺は何事も真っ向勝負で、まっすぐな川のように突き進む。それに、さような真似をすれば、お主が困るではないか」なるほど、あくまで己が意思で仕えて欲しいと、信親は願っているわけか。

「お主はぴんと一本、筋の通った男ゆえ、強いれば出奔でもしかねん。他家に仕官されたら、土佐にとっては大損だ」

武士に戻る気はなかったが、忠兵衛ほど重用されれば、嫡男が出奔しても、さしたる咎めは受けまいと見立ててもいた。恵まれた境涯のわがままな御曹司だとばかり思い込んでいたが、初めて、信親が接する値打ちのある人間のように思えてきた。

「諸葛孔明はその昔、三顧の礼で迎えられたと聞く。俺は十顧も、百顧も厭わぬ」

さっと立ち上がった信親は、皓齒を見せながら笑う。

友よ 第1回

「俺と一緒に住まぬか、彦十郎？　きっと楽しかろうぞ。また参るゆえ、考えておいてくれ」

踵きびすを返して去ってゆく信親の後ろ姿に、落胆した様子は微塵みじんも窺えない。

人の世は醜く、人は弱い。世は思うに任せぬことばかりだ。

三年前、相思相愛だった新妻の早すぎる死に遭遇したとき、彦十郎は世を憐はかなんだ。人が、誰もかもが、嫌になった。十九歳にして得た厭世と諦観が、生き方を決定づけた。

——人はいずれ諦める。あの御曹司とて、同じだ。

いつの間にやら集まって再び鳴き始めていた蝉たちが、またギギッと驚いて、去った。

信親が座っていた辺りに目をやると、一抹の寂しさを覚えた。

妙な感じだ。

「不思議なお方でございますね。とても大国の御曹司とは思えません。今日も川の匂いがしましたよ。きっと、やんちゃをなさっていたのでしょうか」

ひとり朗らかに喋りながら、お橋が姿を見せた。白い花を生けた花瓶を手をしている。

「その、花は？」

純白の擬宝珠ぎぼうしの花が頭こぶを垂れながら、健気に咲いていた。

「御曹司が、岡豊城からの道すがら見つけられたそうです」

友よ 第1回

何度目かに信親がやってきた折り、神事の終わるまで待つ間に、彦十郎が亡妻の好んだ擬宝珠の花を墓前に捧げている話をお橋がしたという。

「何日も前にわたしが転んで、膝小僧を擦り剥いたのを覚えていらして、怪我は治ったかとお尋ねになりました。御曹司は民の心の痛みがわかるお方だと思います」

やって来るたび、信親は神社の者たちに親しく声を掛けた。

連れてきた従者たちと共に庭の清掃、井戸の水汲み、境内の修繕、神殿の閉扉まで手伝う。利害打算でなく、誰かのために何かをしていると落ち着かぬ気性らしい。信親の周りには必ず笑顔が生まれ、陽気な風が吹いた。今では神社の皆が信親の人柄に惹かれている。

黙っていると、お橋がわかったような口振りで問いかけてきた。

「きつと義兄^{あに}うえは、またこの神社を出て行ってしまわれるような気が致します」

擬宝珠の白い花びらに指先で触れていると、お橋が付け加えた。

「彦十郎さまのおかげで、姉うえはとても幸せだったと思います」

「……なぜ、お前にわかる？」

二十歳にもならぬ若い身空で命を落としながら、どうして幸せなものか。人生が何かもわからぬまま、死んだはずだ。

「姉うえを、大好きでしたから……」

彦十郎は神前の方へ向き直ると、着衣の乱れを直した。

友よ 第1回

乱世にあって、人はいかに生くべきか。

世に背を向けて生きるか。

それとも、わずかでも世を変えようと抗うか。

彦十郎は前者を、あの若者は後者を選んだ。それは、生まれ落ちた星のゆえだ。今のままでいい。だが、すべてから背を向ける生は、死とさして変わりない気もした。

御神体の鏡を見上げる。ポツと、橙色の灯りが鏡に映った。

お橋が灯してくれた油火だ。

——神でさえ、乱世においては無力なのだ。人間ごときに、何ができるものか。

鬱蒼うつそうとした鎮守の森に届く光は、もうわずかだ。

また鳴き始めた蝉たちも、ほどなく夕暮れに静寂を譲るだろう。

妻の死以来ずっと鬱屈うっくつしていた心に、珍しく清々しさを感じているのはなぜだ……。

信親はそろそろ、岡豊城に帰り着くころか。



二

山麓から柔らかく吹き上げてくる川風は、爽秋を思わせる心地よさだった。

南を流れる石清川いwashigawa（現・国分川）を天然の堀とした長宗我部家の居城は、岡豊山を丸ごと要塞とした大ぶりの城で、勢力の拡大に伴い拡

友よ 第1回

張されてきた。家老とその一族の屋敷は、南斜面に切り開かれた曲輪の幾つかに分かれて所在しており、一門衆である波川家の屋敷もその中に入った。

眺めの良い屋敷の離れで、波川弥次郎が手慰みに龍笛を吹いていると、何やら玄関のほうが賑やかになった。姉のお福の甲高い笑い声も聞こえ、すぐに来訪者がわかった。主君の信親だ。弥次郎にとって、ひとつ年嵩の従兄に当たる。

「弥次郎、四万十から戻ったと聞いたぞ！」

父が新たに中村の城代とされ、この夏初めて弥次郎は四万十川を訪れた。半刻ほど前に旅装を解いたばかりだが、信親はいち早く聞きつけたらしい。

「息災にしておったか、弥次郎？」

信親は、弥次郎に限らず家人も含めて、皆が「息災であるか」をしきりに確かめたがった。口先の挨拶ではない。この春先、家人の老婆が急病で寝込んでいた時も、信親は自ら背負って城下の薬師のもとへ連れて行った。長宗我部を継ぐ者として、土佐に住まう皆が幸せでない気が済まぬらしい。

迎えに出ようとすると、お福に案内されて信親がやってきた。いつもの笑顔で、元気潑刺だ。他の季節は色白だが、夏日で浅黒く焼けた顔に、皓齒が眩しい。

友よ 第1回

信親が現れると、そこにパッと花が咲く。周りにいる人間の心の中で次々とつぼみが開き、花畑になってゆく。不思議な力だ。内気で引っ込み思案の弥次郎にとって、学問、武技、文芸その他すべての点で優れている信親は、憧れの従兄だった。

弥次郎の父・波川清宗は、国主元親さよむねの妹を娶った一門衆で、弥次郎は時おり滞在する波川家の本貫地よりも、岡豊にいる期間のほうが長かった。家臣の妻子を城内に住ませるのは、もともと人質の意味合いだったが、今や清宗は、長宗我部が滅ぼした一条家の旧領中村の城代を任されるほど、元親の信を得ていた。

「ご健勝のご様子で何より。それがしは相変わらずでございますが」
笛の腕前はこれ以上簡単に上がらぬし、苦手な武芸も敬遠していて、上達しなかった。ずっと童のままであられば助かるのだが、弥次郎もこの春ついに元服してしまった。

「よき笛の音が聞こえた。お前のように笛が上手に吹ければ、愉しからうな」

弥次郎のごとき人間でも、信親は必ず良いところを見つけて、自分も捨てたものではないと思わせてくれる。だから信親は、誰からも好かれるのだろう。

「おお、川がちょうど見頃だな。こいつを拝めるとは、今日は運がよい」

友よ 第1回

縁側に並んで座り、川を眺める。夕日で橙色に染まる川面は、楽しみに小躍りしているようだ。

いつも信親は前向きだった。些細なことでも喜んでくれるから、喜ばせがいがある。

「さてと、弥次郎。四万十川では猿猴に会えなんなのか？」

信親はずっと猿猴を探していた。信親を猿猴好きにした張本人は、谷忠兵衛だろう。元神官で土佐の神々に詳しい忠兵衛は昔、稽古事ばかりの幼い弥三郎から頼まれ、ある祭りに連れて行った。岡豊城の少し南、下田川のほとりにある漂須部明神の夏祭りである。「ひょうすべ」とは猿猴の鳴き声の一つらしく、夏祭りの夜には祭神である猿猴に奉納相撲をして最高に盛り上がる。信親は大いに楽しんで、以来「猿猴」と聞くと目を輝かせるようになり、出会う大人をつかまえては訊ね、猿猴について記したあらゆる書物を読み、調べた。今では忠兵衛よりも猿猴に詳しいに違いない。お気に入りの太刀も、朱塗りの拵こしらえに猿猴の目抜きを付けている。

「生憎それがしはまだですが、猿猴を見たと申す川漁師と話をいたしました」

「まことか！」

信親が唾を飛ばしながら、身を乗り出してくる。

「必ず猿猴はいる、と。どうやら人間を恐れて、広い四万十のどこかに隠れておる様子」

友よ 第1回

「さもあらん。やはり四万十川は石清川よりも大きいのか？」

「はるかに大きゅうございます。おまけに、空よりも青いのです」
わが事のように、弥次郎は誇った。

土佐国は異様に東西に長い。その西端を流れる四万十川は、岡豊から遠く、土佐で最後に征した地であるため、信親も未訪だった。土佐には「四万十」と「仁淀」の二大^{によと}河川があり、長宗我部はさらにへ四国三郎と呼ばれる吉野川流域を征しようとしていた。

「四万十の川沿いを歩いておりましたら、茶色だった河原がある日、真っ白に変わったのです」

「なぜだ？」信親が真剣な表情で尋ねてくる。

「小さな花が一斉に咲いたからです。川漁師に尋ねると、河原^{かわら}母子なる夏の花だとか。若様にもお見せしようございました」

さらに別の川べりでは、真っ青な川面を背にして、河原一面の葦^{あし}原^{はら}に黄褐色の花穂が咲き乱れていたと告げると、信親は目を閉じ、^{まぶた}瞼^{まぶた}の裏でその様子を思い描いている様子だった。

「初陣さえなくば、明日にでも行くのだがな」

大好きな信親が大の川好きだから、弥次郎も川を好きになった。川を話題にし、川の良さを褒めると、信親は本当に嬉しそうな顔をする。だから弥次郎も川へ行き、川の素晴らしさを見つけ出す癖がついた。通ううち、川の虜になった。

「そうだ、弥次郎。お前に頼みがある」

友よ 第1回

手先が器用な弥次郎は煤竹、漆、黒檀、膠や籐を用意して龍笛を作れるほどで、時どき信親から物作りを頼まれた。竹とんぼから竹水筒、竹籠まで作り、信親の病がちの母、石谷ノ方に贈る花入を一緒に作った時もある。実は信親を喜ばせようと、猿猴の竹細工を思案しているのだが、何ぶん見たことがないため、うまく作れないでいた。

「それがしにできることなら、何なりと。若様と新しい曲など合わせても楽しそうでごさる」

弥次郎の笛と信親が得意な鼓をうまく合わせ、家中で披露して喜ばせたりもした……。

だが信親はひどく真面目な顔つきになって、重々しく告げた。

「いや、生憎と重い話だ。次の讃岐での戦、お前も一緒に出陣してくれぬか」

だしぬけに発せられた信親の言葉に、弥次郎は飛び上がらんばかりになった。あと数年は戦に出ずともよかろうと、勝手に思い込んでいた。

「御館様は二十二の齡に初陣を果たされました。まだまだ早うございまする」

「お前はもう、立派な波川家の後継ぎだ。早すぎはせぬ」

「それがしの武芸のほどは、若様もご存知のはず。敵から馬鹿にされては、長宗我部一門衆の恥。ご勘弁くださいませ」

弥次郎の顔は今、泣きそうになっているはずだ。

友よ 第1回

「お前は俺が鍛えてやろう。出陣まで、まだ何ヶ月かある。皆で戦に出たい」

信親の周りにはいつも若者たちがいて（信親衆と呼ばれていた。家臣の子弟はもちろん領内の土豪の次男坊や三男坊、腕に覚えのある一領具足の倅いぢりようぐそくなどが多いが、武芸自慢の者ばかりのため、かねて信親は谷彦十郎を直臣じきしんにしたいと漏らしていた。

「ときに、谷殿は何と？」

「実は、てこずっておってな。何とすれば、彦十郎の心を開けると思いう？」

変わり者で有名な若者だ。武士をやめる前は城内でたまに見かけたが、眉目秀麗ひよくしゅうれいではあれ、いつも無愛想な表情で独り書物を貪るように読んでいた。人付き合いを極端に嫌っていて近寄りがたいが、大人たちは「若き逸材だ」と口をきわめて褒めそやした。

「谷殿を川へ誘ってみては、いかがでございましょう」

信親はさも残念そうな顔で二、三度かぶりを振った。

「すげなく断られた。どうも関心がないらしい。変わった男だ」

彦十郎は「川は水が集まって流れるもの。それ以上でも、それ以下でもござらん」と、にべもなく言い切ったという。

「谷殿とて人の子なら、川の良さがきつとわかるはず。四万十は遠すぎますが、あの仁淀川の青さを見れば、川の虜こいつとなるは必定ひつじょうにございまする」

友よ 第1回

信親は石清川の最後の煌めきに目を細めながら、頷いた。

「そうだな。至誠、天に通ずだ。諦めまい」

「初陣には、是非とも谷殿を伴われませ。それがしなど、無用にございます」

「家中に優れた者たちは多いが、家の事情で当主になったり、すでに自らの隊を率いておるのだ」

例えば同じく従兄弟にあたる一門衆の吉良親実・親正兄弟は勇名高く、信親と肝胆相照らす仲だが、父の親貞が若くして亡くなったために親実が吉良家を継ぎ、二人で岡豊を離れて久しい。所領の拡大で一門衆の多くは遠方の守りに就き、その子弟も岡豊にいなくなった。讃岐攻めに出陣する者たちはごく一部だ。

「結局、幼馴染の一門衆で俺のそばにいられるのはお前くらいでな。俺は近くに誰かおらぬと、どうも落ち着かぬ。弥次郎が隣にいるだけで、俺は心強いのだ」

心臓がドクンと音を立てる。誇りに思った。信親の脇に侍しているだけなら、確かにできる。

「俺の初陣ゆえ必ず勝つと、父上は仰せであった。どのみちお前も、遠からず初陣せねばらん身だ。気が進まぬなら、なおのこと早めに済ませておいたほうが良かろう」

なるほど御曹司の初陣は、長宗我部が確実に勝つ戦で行われる。ついでに自分も初陣を果たせば、負けはせぬし、目立たずに済む。

友よ 第1回

「薙刀を使うてみよ。お前は決して筋は悪うない」

信親に褒められると、嬉しくなる。膂力の低い女子でもしばしば得物とする薙刀は、体格で劣りがちな者に向いている。信親が手ほどきをしてくれ、さらに家中一の使い手で、信親の師でもある太平市郎右衛門に口を利いて、弟子入りさせてくれるという。

「されど何とも、自信がございませぬ」

信親は弥次郎のためを思ってくれている。だが、たとえ信親のように強くなれたとしても、殺し合いなどしたくなかった。弥次郎は釣った魚を絞めるだけで、精一杯だ。

「安心せよ、弥次郎。俺が必ずお前を守り抜いてみせる」

信親が逞しい腕を肩に回してきた。香ばしい汗の匂いがする。弥次郎の大好きな匂いだ。

寂しがり屋の信親は、見境なく誰とでも仲良くなるが、一番親しく接している人間は、弥次郎ではないか。通称の「弥三郎」が、「お前と一字違うだけだな」と信親から言われただけで、弥次郎は嬉しい。立身出世など全く望みもしないが、信親の信だけは失いたくないと強く思った。

「わが父ともよく談合のうえ、お返事申し上げます」

——されど、人が人を殺すのは、変ではございませぬか？

弥次郎は最後にこう問いかけたかった。でも、信親を苦しめるだけだと思い、やめた。



岡豊城で国の大事を諮る時、主君長宗我部元親は決まって、南に面した一室を選んだ。土佐一國を睥睨するがごとき見晴らしを楽しめるからだろう。

谷忠兵衛忠澄が讃岐の情勢を語り終えると、しばしの沈黙の後、元親から下問があった。

「まずは西讃だが、藤目城の守将は、名を何と申したか」
「新目弾正なる将にございまする」

藤目城は阿波池田と讃岐丸亀のほぼ中間に位置し、山中の国境を越えて、西讃岐への侵攻路の入口にある。枢要の地でありながら、堅固でない要害だった。立地は良いから、攻略後に城を築き直せば、長宗我部にとって西讃攻略の橋頭堡とできる重要な拠点と言えた。藤目城を捨て置いて、背後に敵を抱えながら西讃に攻め入るとい法はない。

かつて讃岐は細川家の領国だったが、主家になり変わった三好家が、一時期わが世の春を謳歌した。時が移ろった今では、力を失った三好家を継いだ十河存保が、讃岐の土豪をかるうじて勢力下に繋ぎ止めているだけだ。

もともと藤目城を築き守っていたのは、有力土豪である香川氏の家臣、斎藤師郷だった。一昨年、元親の威迫に屈した斎藤は、戦わず

友よ 第1回

して長宗我部に降ったが、この夏、三好方の香川、羽床、奈良ら土豪が藤目城へ攻め寄せると、守り切れぬと見て落ち延びた。その後、土豪の一人、奈良勝政が藤目城の守将として置いた無名の若者が、新目弾正だった。

「入江左門の調べでは、五百ばかりの兵で城を守っております」
藤目城陥落の報を受けた元親は怒り、これを奪還するため、秋の収穫を終えてから西讃へ再び出陣すると公言し、家臣団も支度を進めていた。

「その者、齡は幾つか？」

元親がじろりと忠兵衛を見た。若い頃は色白細面の美男子でへ姫若子と呼ばれた元親も、今では苦み走った中年の渋みが出ている。

「まだ二十二だとか。これまでの戦で、名は上げておりませぬ」

「凡将か。降らねば、その若者も哀れじゃな」

元親がようやく二十二歳で初陣した話は有名だった。新目に同情を覚えたらしい。

「五千の軍勢で侵攻すれば、ひと揉みで落とせましよう」

忠兵衛の見立てに、元親は軽く頷いた。

「馬骨の将に、たった五百の兵で要衝を守らせるとは、長宗我部も見くびられたものよ」

元親は愛用している濃鼠の鉄扇を開き、ゆったりと扇ぎ始めた。
「信親様の初陣は、緒戦の藤目城攻めが手ごろではございませぬか」

友よ 第1回

元親はすぐに顔がなかった。元親の信親への入れ込みようは尋常でない。おろん愛息の初陣は華々しい勝利で飾る。初陣とは、勝ちの見えた戦で、形ばかり派手な勲功をあげさせる儀式にすぎない。有力大名家なら、どこでも同じだ。

元親は瞼を閉じ、固く口をつぐんでいた。

鉄扇だけが静かに動いている。

遅しく育ち、怖いもの知らずの信親は、一刻も早く戦に出たいと望んでいた。元親も、愛息を乱世の将として飛翔させるために、若年で初陣させたいと考えてきた。十四歳はやや早めだが、元親の初陣が遅く、昔、自身が馬鹿にされていた事情もあったろう。

だが万が一にも、信親の体に傷ひとつ、負わせるわけにはいかぬ。

藤目城は要衝に築かれているが、幸い小さな城で堅牢でもなく、地の将が寡兵で守っているだけで、激しい戦にはなるまい。

元親は口数の少ない主君で、しばしば沈思黙考した。家臣はその間、じっと待つ。

微かに聞こえる夕蟬の合唱のほかは、規則正しく動かされる鉄扇が軋む音だけだ。

「無名の将の首とちっぽけな城か……。信親の初陣にとって、不足ではないか？」

友よ 第1回

今回の遠征では、緒戦の藤目城よりも、その後の西讃攻略戦こそが肝心だった。元親は大戦での大勝利をもって、愛息の初陣を飾りたらしい。

「さりながら、香川家の天霧城を攻め落とすには、時を要しましう」

西讃の雄、香川之景は多度、三野、豊田、那珂の四郡を治め、西讃岐の守護代まで務めてきた名門であり、新目某とは違い、鎧袖一触で破れるはずもない。

年が明ければ、信親は十五歳になる。元親は十四歳での初陣にこだわっていた。

「こたびは敵に奪われた城を取り戻す戦。小城の攻略でも、栄誉は得られましょう」

忠兵衛が言葉を足しても、元親は頷かなかった。

本来、元親は決して優柔不断な主君ではない。慎重ではあった、果断だった。だが、こと信親に関する限り、即断はしなかった。考えすぎるほどに考える。

「むしろ五千の兵を前に、新目が全く戦わずして降りさせぬか、心配にございます。その折りは、改めて別の戦で手柄をお立ていただくほかありませんまい」

忠兵衛が付け加えると、元親は小さく頷いた。

「熟慮しておこう。引き続き、西讃の様子を入江に探らせよ」

友よ 第1回

入江は長宗我部きつての手練れの忍びである。仕事に失敗はまずなかった。

すでに夕日は山の端に沈み、岡豊にはもう、蟬の鳴き声はまったく聞こえなかった。



四

秋を告げ始めた虫たちのぎこちない鳴き方は、終わりゆく夏にまだ少しばかり遠慮している様子だった。

長宗我部宗家の居館は、岡豊山南麓の川の辺、大手門に入った左手に建っている。

十五年前に嫁いで以来、夫が岡豊にいるとき、滝（石谷ノ方）は決して先に床に就かなかった。必ず部屋に明かりを灯して、元親の帰りを待つ。今日は猫顔の忠兵衛と大事な話をしているらしかった。

滝は我慢強いほうだが、近ごろの胸の悶（つか）えは強い痛みを伴って襲ってくる。尋常な病でないかわかっていた。

廊下に足音がした。落ち着いて一步一步踏みしめるような音だ。元親はいかなる時も慌てることがない。その歩き方の通り、元親は土佐の一土豪から四国統一を目指す大名へと着実に歩んできた。夫は偉大な主君として家臣たちに崇められ、敵から恐れられているが、滝にとっては今も昔も変わりなく、誰よりも優しい夫だった。

友よ 第1回

侍女が襖を開けると、滝は両手を突いた。今日は元親が好む水浅葱みずあさぎの小袖を着ている。

「滝、加減はどうじゃ？」

夫の優しい問いかけに、今日は本当のことを言えるのが嬉しかった。

「昨日より、少しばかり良くなった感じがいたします」

「さようか」

元親は言葉少なだが、思いやりがあつて、羽目を外すこともなかった。滝は元親に対し、ただの一度も不満を覚えたことはない。自分ほど幸せな女もいまいと思つてきた。

二十二歳での初陣からわずか三年、戦国の世へ打って出たばかりの若き元親は、足利幕府との繋がりを得ようと政略結婚を望み、前の將軍足利義輝よしかるの近臣石谷光政いしがひみつまさの娘を娶った。滝である。土佐の小土豪との縁組の話をつから聞かされたとき、滝はただ「怖い」と思った。遠い土佐については昔、流刑地るけいちだったことくらいしか知らなかった。「きっと田舎侍が美濃みの一の美姫みぎだという噂を聞きつけたのでしょ」と、侍女は悪口を言っていたものだ。

だが、滝と侍女の予想は良いほうに大きく裏切られた。滝を妻に迎えた若者は、今まで滝が会った人間の中で誰よりも優しく、親兄弟よりも滝を大切にしてくれた。元親は他の女には見向きもせず、土佐一の鴛鴦おしどり夫婦は、四男四女をもうけた。

友よ 第1回

「よく眠れておるか」

すぐそばに向かい合って、元親が腰を下ろした。

「はい。昼間には、居眠りまでしてしまいます」

「眠くなるのは、新しく試した薬のせいやも知れぬな」

元親は智謀の塊のような男だ。滝の応答が気休めだと見抜いている。三年前には、京は天龍寺てんりゅうじの高僧、策彦周良さくげんしゅうりょうから、二人揃って法号を受けた。戦で人を多く死なせたからだと言親は言っていたが、本当は来たる時に備え、滝が三途さんずの川を無事に渡れるようにと考えてくれたのだろう。

「穴喰屋しきくいやのお薬のおかげで、胸の悶えが少し軽くなってきました」

この春、元親は薬師と長い間、話し込んでいた。その後、御用商人である穴喰屋に言いつけ、心ノ臓に効く薬を片っ端から集めさせては、館へ届けさせていた。昨秋、元親が館から叩き出したある薬師からは「余命一年」と言われたが、あと数年は生きられそうな気がする。「それはよい。だが、さらなる良薬があるやも知れぬ。引き続き、探させよう」

元親がはにかむような笑みを浮かべている。滝と信親にだけ見せる笑みだった。他の七人の子を含め、家臣たちに向けられたことはないはずだ。

「お心遣い、痛み入ります」

夫は、何のために戦いを続けているのだろうか。

友よ 第1回

土佐には平地が少なく、与えられる扶持も限られているから、家臣団の暮らしを豊かにするためには、他国の土地を切り取る必要がある。強くあらねば滅ぼされる乱世の理もあった。勢いに乗り夢をますます膨らませてゆく家臣たちの大きな期待を、元親は一身に背負ってもいた。勇ましい一領具足たちを率いる知将、猛将たちも、はたまた長宗我部の猛攻に震え上がる敵たちも、元親が野望に燃え、四国統一に邁進していると思ひ込んでいるはずだ。

だが滝は、この優しい夫の抱く思いが、どこか別な場所にあるような気がしていた。東伊予を攻めさせ、腹心の久武親信に早期の伊予攻略を命じているのは、「神代から名高き道後の温泉に浸かってみたいからだ」と言っていた。が、いたって壮健な元親には持病もない。滝のために違いなかった。

「いよいよ弥三郎も、初陣とか」

元親がそっと滝を抱き寄せてきた。身を任せる。

「藤目城という城に決めた。余のごとく初陣を遅らせて、肩身の狭い思いはさせぬ」

元親の信親に対する愛情は、他の子らとは明らかに違っていた。

「目を瞑っておっても勝てる戦での初陣じゃ。そなたは毫も案ずる要はない」

友よ 第1回

普段から元親は政について妻に多くを語らなかつたし、滝も尋ねなかつた。滝は裏から元親を支えればいいのだ。ただ、自分の病が不甲斐なかつた。

「何事にも一生懸命な弥三郎なら、きっと立派にやり遂げるでしょう」

母として、滝は子らを分け隔てせず慈しんできたが、四人の男子のうちでは、誰が見ても長男の信親が段違いに優れていた。弟たちも兄を敬い、憧れている。信親なら、次代の長宗我部家を率いてゆけるはずだ。長宗我部家に寸分も隙はなかつた。

「懸念は、わが軍に怯え、藤目城の守将が戦わずして降ることくらいじゃな」

いつものように、戦上手の元親が負けはしない。きっと忠兵衛あたりには諮り、万全の態勢を整えた上で、信親の初陣を見事に飾るだろう。

元親の腕の中にと、ほっとする。異国の地で見つけた、滝の楽土だ。

気が付くと、秋の虫が遠慮会釈なく、賑やかに鳴いている。

わが子の初陣は、この冬だ。

この時の滝と元親には、来るへ藤目城の戦いへが史上稀に見る激戦となることを、まだ知る由もなかつた。

(つづく)